

# 研究だより

NO.13

2019. 8. 19

1年担任

## 学びの共同体での形と心

7月25日、ブックトークの前日に「いじめ対策委員会」の会議を行った。各学級がまとめた資料の中に「グループ学習の中で、何度教えてもわからない〇〇くんがいやだ。」と言われ、いじめとして訴えた児童がいた。ほんの一握りのケースだろうと思うが、1年生にも当てはめながら思いを巡らせてみた。学びの共同体の「形」には当てはめようとするが、「心」がついていないのではないだろうか。

1年生の1学期を振り返る。

国語では活動を変化させることで飽きを防ぐため、45分を概ね15分ずつの3ブロックに分け、1ブロック目は言語事項。例えば、「あ」の書き方を学び、「あをつく言葉を考える」といった内容である。

①4、5月、まずはペアで1枚のプリントに相談しながら書き込んでいく。一緒にやってみる。子どもたちは、「一人よりは楽しい。」といった感じである。

②5月の後半、次に、席の後ろの人といっしょに考えてもいいことにする。「2人で考えるより、たくさん言葉を見つけられるぞ。」と感じている子どもたちも少なくないようだ。

③6月からは、3人グループの座席にしてみた。担任として伝えたことは、「一人で考えてもわからないときは、周りの友だちに訊いてみよう。」「訊かれたら自分の考えを伝えよう。」程度。①、②と同様の様子はみられるが、見えてきた課題の1つは、「3人のうち、力のある2人だけで考えて、1人は蚊帳の外というケース。」自分からは訊けず、周りの子も関わろうとしない。

▲「だれも一人にさせない。」という心を育てるにはどうすればよいのだろうか。

「周りの友達が困っているようだったら、だいじょうぶ？」と声をかけてみようとは言ったものの、心を育てることにはなっていない。様々な場面で、子どもたちに問いかけ、課題意識を持たせていくことの必要性に気づく。これから大人になっても必ず必要になってくる力だから、重要な部分であろう。

7月26日、「学び合う教室文化をすべての教室に」のブックトーク。本には、「学び合う教室文化は、いじめを生まない」という記述があるので、せっかくの機会だと思い、前述したいじめの訴えについて話題に出してみた。純平先生は、「だれにもかかわろうとしない〇〇さんでも、グループのみんなが一生懸命に教えてあげようとしたら、きっとうれしくなるはず・・・」つまり、自分が大切にされた人は、その喜びを知り、他の人にもそうしたくなるはず」ということだろうか。それは、「形が先であっても、やがて心が変わってくる」ことになる。確かにそれもあると思った。

ある本に、「世界を平和にするには簡単な方法がある。それは、自分の隣の人を大切にすることだ。」という言葉があった。今は、小さな1年生の小さな社会の問題だが、これから大きな社会の中での大きな力につながっていると感じている。

